

## 司会の言葉

葛原 茂樹（鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科）

福武 敏夫（亀田総合病院神経内科）

（神経治療 32：211, 2015）

第32回神経治療学会総会には、河村満会長ならではのユニークな企画がいくつかあったが、その一つが本企画であった。今日の画像診断全盛時代に育った神経内科医には想像し難い事かも知れないが、神経学の長い歴史の中で、つい最近まで神経症候学は診断学、特に病変局在診断学において極めて重要な位置を占めていた。これは、神経損傷の結果として出現する神経症候が、その病変が存在する場所と病変の大きさ、更にはその性質（原因）までを極めて正確に反映しているという、神経疾患ならではの特殊性の反映でもある。従って、神経解剖学と神経生理学、神経症候学に精通することにより、高価で複雑な機械を使ったり時間をかけることもなく、自分の脳と五官と簡単な診察器具だけで相当正確に病変局在と広がり、病変の性質までを診断できたのである。

病変の部位と広がり、性質に関する正確な診断があってこそ、適切な治療が可能である。従って、患者に苦痛や経済的負担を強いることなく即座に実施できる神経学的診察によって得られる神経症候学的所見と、それから導かれる診断は正に神経治療学の魂であり、最高の医術の一つであると言っても過言ではない。卓越した神経症候学者・神経心理学者である河村会長は、検査万能時代における神経症候学の意味と重要性を、「神経治療学の魂」という言葉で表現されたものと推察する。

シンポジストの4氏は、いずれもCT/MRI出現以前に臨床神経学と神経症候学のトレーニングを受けた世代の臨床神経学者であり、本シンポジウムのテーマに沿って臨床神経学の偉大な先達の業績を語る適任者が選ばれていた。

廣瀬氏は英国神経学のメッカであるロンドンQueen Squareの沿革と歴史、そこで活躍した神経学者達を、Hughlings Jacksonとてんかん学、William Gowersの症候学と挿絵入り

著書、Kinnier Wilsonの脳症候学とWilson病発見を軸に紹介した。福武氏は、カナダ生まれで米国のボストンで活躍したCharles Miller Fisherの多彩な業績について紹介した。Fisherの名が冠された症候群は、ラクナ梗塞のMiller Fisher症候群、Guillain-Barré症候群の亜型のFisher症候群を始め、NPH、TGAなど症候学と魅力的命名の大家ともいえる。しかし、詳細な観察と病歴に基づいて提唱した心原性脳塞栓の概念は、当時優勢であった血管攣縮説の影になり、日の目を見るのに40年かかったという秘話も披露された。

古川氏は、最も有名な足底反射の発見者であるJoseph Babinskiについて、「治療などには目もくれず症候学研究に熱中していた」という彼の観察者の言葉を紹介し、文化的遅滞という言葉を用いて、神経学における高度に発達した症候学の価値、治療学における役目と限界について、文化論的にみた症候学論を展開された。最後に、葛原がRobert Wartenbergの人と業績を紹介した。彼は臨床神経学の習得のために各国を遍歴し多くの神経学者から直接に教えを受け、南ドイツで活躍していたが、ナチスに追われて1935年に米国に逃れ、サンフランシスコを拠点に臨床神経学の普及と後進の育成に大きな貢献をした。明快・平易が貫かれた名著の「反射の検査」と「神経学的診察法」は、戦後のわが国の神経内科医と脳神経外科医のバイブル的入門書となった。彼は、病歴をよく聴き、巧みな診察手技を駆使して診断し治療することによって、患者の肉体的、経済的、時間的負担が軽減でき、検査所見も活用できる事を強調した。

結語：神経症候学は先人neurologist達の知恵と知識の結晶であり、最新の検査機器を利用できる現代においても、患者に早く安全に良質の医療を届ける上で極めて有用であり、神経学の真髄であり神経治療学の魂である。